訪問リハビリテーション利用者における目標の理解度調査

古川博章，比嘉秀人，山村久美，近藤浩司

ふらむはぁと訪問看護リハビリねっと綾部

要旨：

【背景および目的】療法士が利用者と関わる上で，目標を形成することの効果が報告されている．そこで，当事業所の訪問リハビリテーション（以下，訪リハ）利用者と療法士間における目標の内容と理解度を調査した．

【方法】対象は，当事業所の療法士と，2019 年３月末の時点で当事業所の訪リハ利用者（要介護１～５）の 27 名とした．調査手順として，まず療法士自身が設定した目標を記述し，その後，利用者に対し担当療法士が訪リハの利用目的について聞き取り調査を行った．回答は複数名で確認し，利用者と療法士の回答内容について，完全一致，部分一致，不一致に分類した．目標の内容については，KH Coder を用い，回答結果から単語の出現数を算出した．

【結果】利用者の理解度は，部分一致 63％，不一致 37%で完全一致したものは無かった．また，KH Coder の結果から利用者，療法士ともに回答の中で最も多かった単語は，「歩行」であった．

【考察】今回の調査から，利用者と療法士が目標を共通理解できているとは言い難い結果となった．今後，療法士と利用者間の相互理解を改善するための方法を検討する必要があると考えられた．

key words ：訪問リハビリテーション，目標，理解度，利用者

Ⅰ．はじめに

訪問リハビリテーション（以下，訪リハ）において，適切に目標設定を行い介入することが重要である[1)]．Locke E.A.らの目標設定理論において，目標自体が本人の活動に注意を向けるような指示機能を果たすことや，難易度の高い目標を設定することにより大きな努力を得ることで，ただ最善を尽くすよう促すよりも高いパフォーマンスにつながり，他者からの適切なフィードバックを行うことで効果的な目標達成を促すと報告されている[2)]．

合意目標を形成することの効果に関してはいくつかの報告がある．Gauggel,S らは，難易度のやや高い目標は，do your best と指示されるより，ペグボードのパフォーマンスが上がると報告し[3)]，Levack WM らは，身体的な要素よりも健康関連 QOL や自己効力感などの心理的な要素に効果があると報告している[4)]．また，Nagayama らは日本の老人保健施設において，合意目標を設定することで Barthel Index の改善と高い費用対効果があったことを報告している[5)]．

その一方で，矢野らは訪リハにおいて，利用者と療法士間の目標の一致率による実際の理解度については十分でないと報告しており[6)]，当事業所における訪リハでの臨床場面においても，本人と療法士間で目標の認識に乖離を感じる場面は少なくない．そこで，当事業所の訪リハ利用者と療法士間における，目標の内容と理解度の現状を調査することとした．

Ⅱ．方法

１．対象

対象は当事業所の療法士（理学療法士４名）と，2019 年３月の時点で当事業所の訪リハを利用されていた要介護１～５の 27 名（75.4±10.7 歳，要介護１：４名，要介護２:10 名，要介護３：７名，要介護４：３名，要介護５：３名）とした．利用者の訪リハ利用期間は 764.3±427.6 日（中央値：941 日）であった．なお，認知症の診断を受けているもの，または質問の理解が困難なものについては，その家族へ聞き取り調査を行った．

２．調査手順

〈目標の内容に関する利用者の理解度〉

まず，担当療法士に療法士自身が設定した目標を，調査紙に記述させた．その後，利用者に対し，担当療法士が訪リハの利用目的について聞き取り調査を行った．なお，質問の文言は著者が設定し，担当療法士はその文言を読み，利用者へ質問することとした．双方から得られた回答に対して，調査に参加していない療法士を含めた複数名で判定を行い，完全一致，部分一致，不一致に分類し，その割合を算出した．

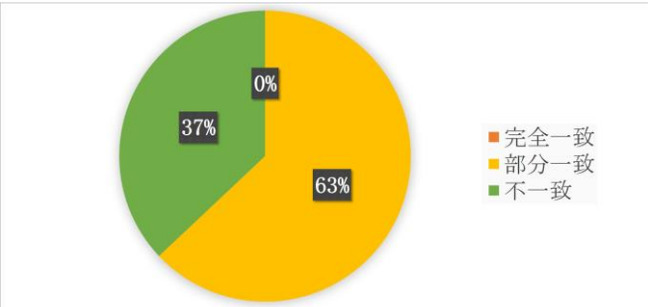

図１　目標の一致率

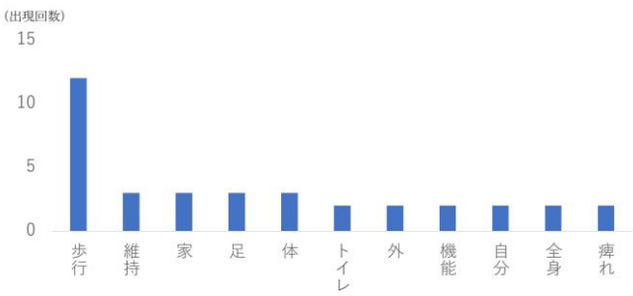

図２　出現単語（利用者）

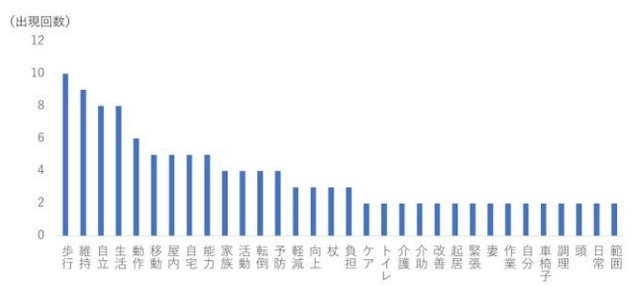

図３　出現単語（療法士）

〈目標内容の調査〉

テキストマイニングの分析ツールである KH Coder[7]を用いて，自由記述内容を形態素解析により単語に分割した．その結果から，療法士，利用者それぞれの名詞の出現数を算出した．

３．倫理的配慮

本調査を行うにあたり，ヘルシンキ宣言に則り，対象者には目的，得られたデータの利用について，十分に説明を行い，回答をもって同意を得た．

Ⅲ．結果

利用者における回答者の内訳は，本人 21 名，家族 6 名であった．利用者の理解度は，部分一致 63 %，不一致 37%で完全一致したものは０％であった（図１）．

目標の内容について，利用者，療法士ともに回答の中で最も多かった単語は，「歩行」であった（図２，３）．

Ⅳ．考察

Maitra らは，目標設定に関する認識は療法士と利用者間に相違があることを報告しており[8]，療法士が目標設定を利用者と一緒に実施したと思っていても，利用者と目標が合意できているかについて定かではない．今回の調査から，当事業所における利用者の目標に関する理解度は十分とは言えず，矢野らの先行研究を支持する結果となった．

Saito らは，療法士と利用者の目標が一致している群では，一致していない群に比べ FIM の運動項目に改善を認めたことを報告していることから[9]，今回の結果のように利用者と目標を十分に共有できていない場合，日常生活動作能力に負の影響を与えてしまう可能性が示唆される．そのため今後は，なぜ目標が一致しないのか，どの時点で目標の認識に関する不一致が生じるのか，また療法士と利用者における目標の共通理解を促進する方法などについて検討し，療法士と利用者の相互理解を図る必要があると考えられた．

目標の内容について，最も回答の多かったものは，「歩行」であった．平成 29 年の厚生労働省の資料[10]においても「歩行・移動」が最も多く，活動・参加に関する具体的な単語の出現は少ない結果であり，今回の調査結果と類似していた．また，目標設定について，ツールを使用しない場合は移動など基本動作が挙がりやすいことが報告されている[5]．当事業所において，療法士間で共通して使用している目標設定のツールはなく，方法は各療法士次第となっているため，今回の結果のように「歩行」が目標の再頻出語となった可能性が考えられる．今後は，事業所内で統一した目標設定ツールの使用も含めて，利用者の活動・参加に繋げられるような具体的な目標設定を行う必要があると考えられた．

本調査の限界として，当事業所の利用者のみに限っており，地域全体の傾向は不明である．また，目標の一致度が日常生活動作能力や利用期間に影響を与えているかについても不明である．よって，今後は他施設の傾向も踏まえた地域特性と，合意目標の適切な設定が利用者に与える影響について検討していく必要があると考えられた．

Ⅴ．結論

利用者と療法士間における目標の共通理解は，十分ではない結果となった．今後，利用者と療法士間の相互理解を改善するための方法を検討する必要があると考えられた．

【参考・引用文献】

１）厚生労働省ホームページ　高齢者の地域における新たなリハビリテーションの在り方検討会報告書（平成 27 年３月）．https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12301000-Roukenkyoku-Soumuka/0000078416.pdf　（2020 年３月 29 日引用）

２）Locke, Edwin A., and Gary P. Latham: Building a practically useful theory of goal setting and task motivation: A 35-year odyssey. American psychologist 57.

9: 705-717, 2002.
３） Siegfried Gauggel & Sonja Fischer: The effect of goal setting on motor performance and motor learning in brain-damaged patients. Neuropsychological Rehabilitation, 11:33-44, 2001.
４） Levack, William MM, et al: Goal setting and strategies to enhance goal pursuit for adults with acquired disability participating in rehabilitation. Cochrane Database of Systematic Reviews 7, 2015.
５） Nagayama Hirofumi, Kounosuke Tomori, Kanta Ohno, et al: Effectiveness and cost-effectiveness of occupation-based occupational therapy using the aid for decision making in occupation choice (ADOC) for older residents: pilot cluster randomized controlled trial. PloS one11. 3. 2016.
６） 矢野秀典, 吉野貴子, 飯島節 : 訪問リハビリテーションの目的に対する理解度に関する検討.理学療法学 31. 3:168−174, 2004.
７） 末吉美喜著 : テキストマイニング入門　Excel と KH Coder でわかるデータ分析, オーム社, 東京, 2019.
８） Maitra, Kinsuk K., and Frances Erway: Perception of client-centered practice in occupational therapists and their clients. American Journal of Occupational Therapy, 60: 298-310, 2006.
９） Yuki Saitou, Kounosuke Tomori, Hirofumi Nagayama et al: Differences in the occupational therapy goals of clients and therapists affect the outcomes of patients in subacute rehabilitation wards: a case-control study. Journal of physical therapy science, 31: 521-525, 2019.
10） 厚生労働省　社会保障審議会（介護給付費分科会）. 訪問リハビリテーション.第 140 回参考資料. https://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-12601000-Seisakutoukatsukan-Sanjikanshitsu_Shakaihoshoutantou/0000167233.pdf　(2020 年 3 月 29 日引用)